平成26年5月5日(月) 日本海新聞

日々往来

大山 陽久

物価上昇率2%の世界とは？

昨年6月に鳥取に転勤して来て、このたび当コラムを担当することとなった。世界・日本各地におけるこれまでのさまざまな経験を踏まえ、県内経済について気付いたことをお伝えし、少しでもお役に立てればと考えている。初回は、アベノミクスが目指す「物価上昇率2%」とはどういう世界か、私なりの考えを述べてみたい。

まず、全ての物の価格がどれも2%上昇し、さらに企業売り上げや賃金など世の中の全ての価額が一律に2%上昇するのであれば、（名目価格から物価上昇率を差し引いた）実質価格はどれも変わらないはずである。

しかしながら、現実には、需要の高い物の価格が上がる一方、人気のない物の価格は据え置かれ、その「平均的な」上昇率が2%になるに過ぎない。デフレ時代にほとんど差がつかなかった企業売り上げや賃金も、総額が2%増加する中で、個々の主体の増加率には大きな差がついていく。すなわち、物価上昇率2%の世界とは、結果的に「競争が激化する世界」であり、また別の言い方をすると「努力が報われる世界」でもある。

こうした緩やかな物価上昇は、デフレ経済下では困難であった予算・資源配分の見直しや経済構造の変化を進展させていき、これが長年の懸案であった日本経済の閉塞感解消と活性化を引き起こしていく。

既に、一部の経営者は、こうした本質を理解し、本競争の勝ち組となるべく、一歩先を見据えた戦略を策定し、投資を積極化している。今までのように、単に景気回復の波及を待っているだけでは、今回の流れに乗り損ねてしまうかもしれない。グローバルな視野と中長期的な展望を持って、成長分野に積極的に投資していく姿勢が、今こそ求められているのではないだろうか。

（日本銀行鳥取事務所長）

◇コラム「日々往来」では、日本経済や地域の動向などを大山氏に語っていただきます。